

徳島大学 GRIP（第1期生・第2期生）の実践報告

—新たな全学的なグローバル人材教育プログラム—

清藤 隆春

KIYOFUJI, Ryushun
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

坂田 浩

SAKATA, Hiroshi
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

チャン ホアンナム

TRAN, Hoang Nam
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

モートン 常慈

MORETON, George
Institute of Liberal Arts and Sciences
Tokushima University
徳島大学教養教育院

要旨：徳島大学高等教育研究センターは2021年度前期から全学的なグローバル人材育成を目的としたプログラム「グローバル・パーソン集中プログラム（Global Person Resource Intensive Program (GRIP)）」を開始した。本稿では2021年度前期（第1期生）と後期（第2期生）を取り上げ、その実践報告および効果を検証していく。分析は学生のアンケートを用いたが、英語力だけでなく異文化理解などの面においても一定の効果があり、GRIPにはグローバル人材育成において一定の効果があったことが明らかとなった。

キーワード：GRIP、グローバル人材育成、オンライン交流

1. 研究の背景と目的

徳島大学高等教育研究センターでは、グローバル化の進む現代において、その時代の変化に対応できるグローバル人材と言われるスキル・コンピテンシーを備えた学生の育成を目的として、2021年度前期から全学的なグローバル人材育成を目的としたプログラム「グローバル・パーソン集中プログラム（Global Person Resource Intensive Program (GRIP)）」を開始した。グローバル人材については、〈要素Ⅰ〉「語学力・コミュニケーション能力」、〈要素Ⅱ〉「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を兼ね備えた人物であると定義づけられている¹⁾。本稿では、2021年度の徳島大学GRIPの各セッションについての実践報告をするとともに、学生のアンケート結果を用いて、そのセッションのグローバル人材育成における効果を検証していく。

2. GRIPについて

2.1 GRIP参加者

徳島大学は2021年度からGRIPを開始し、全学部を対象に募集を行い、前期（第1期生）に14名、後期（第2期生）に14名が参加した。参加者の内訳は以下の表1の通りである。

表1 参加者の内訳

	参加者数
総合科学部	7名
医学部	11名
歯学部	0名
薬学部	4名
理工学部	4名
生物資源産業学部	2名
合計	28名

2.2 前期（第1期生）の概要

前期（第1期生）に行ったセッション項目や時間数は表2の通りである。

表2 前期のセッション項目・時間数の一覧

セッション	回数	時間数
オリエンテーション・事前事後指導	3回	3時間
異文化理解講座	1回	1時間
英語集中講座	12回	6時間
グローバル講演会	1回	1時間
日本文化講座	3回	4.5時間
SIU オンライン留学	20回	40時間
合計	40回	55.5時間

前期（第1期生）は2021年6月にプログラムが開始し、「異文化理解講座」を皮切りに、基本的に週2回のペースで、「英語集中講座」、「グローバル講演会」、「日本文化講座」へと続いていった。なお、グローバル講演会には、グローバル人材として海外で活躍する徳島大学の卒業生を講師として招待して、講演してもらった。英語集中講座には、マレーシア工科大学^{注1)}（以下、UTM）の日本語履修学生との国際交流も含まれている。また、2021年8月中旬から9月上旬（4週間）にアメリカ南イリノイ大学^{注2)}（以下、SIU）と共同開発したオンライン留学^{注3)}プログラムを実施し、毎日21時～23時（日本時間）の時間帯で、学生たちはネイティブの英語教員から英語を学んだり、英語を用いた学生交流を行った。徳島大学高等教育研究センターでは、このオンライン留学の期間中、学生たちのこの国際交流をサポートすることを目的に、週2回のペースで英語集中講座も実施している。

2.3 後期（第2期）の概要

後期（第2期生）に行ったセッション項目や時間数は表3の通りである。

表3 後期のセッション項目・時間数の一覧

セッション	回数	時間数
オリエンテーション・事前事後指導	3回	3時間
異文化理解講座	2回	2時間
英語集中講座	20回	29時間
国際共修プロジェクト	4回	6時間
日本文化講座	3回	3時間
SIU オンライン留学	20回	40時間
合計	52回	83時間

後期（第2期生）は2021年9月にプログラムが開始し、「異文化理解講座」を行った後、約1ヶ月間、日本語と英語の2言語を用いてシンガポール国立大学^{注4)}とPBL型の国際共修^{注5)}を

行った。10月から1月まで、基本的に週2回のペースで「英語集中講座」や「日本文化講座」を行った。なお、英語集中講座には、UTMの日本語履修学生との交流や、マレーシアマラッカ技術大学^{注6)}（以下、UTeM）の英語教員による英語授業（UTeM学生との交流）も含まれる。

また、前期（第1期生）同様に、2022年2月中旬から3月上旬（4週間）にSIUと共同開発したオンライン留学プログラムを実施し、毎日21時～23時（日本時間）の時間帯で、学生たちはネイティブの英語教員から英語を学んだり、英語を用いた学生交流を行った。徳島大学高等教育研究センターでは、このオンライン留学の期間中、学生たちのこの国際交流をサポートすることを目的に、週2回のペースで英語集中講座も実施している。

2.4 本稿で扱うセッション

上記「2.2」や「2.3」のように、2021年度GRIPでは様々なセッションを実施したが、紙幅の都合上、「国際共修」および「SIU オンライン留学」についての実践報告は別稿に譲ることとし、本稿では「グローバル講演会」、「異文化理解講座」、「英語集中講座」、「日本文化講座」を扱うこととする。

3. グローバル講演会

3.1 実施の背景と目的

グローバル人材の育成において、異文化の中で働くことで得られるやりがい、海外生活の中でのワークライフバランス実現、異文化環境の中で主体的にキャリア形成するために大切な心構えを学ぶことが重要である²⁾。また、海外でキャリアを積むことに対する敷居を取り払うために、学生のロールモデルになりうる身近な存在を講師に選ぶことが重要である³⁾。そのため、GRIPでグローバル講演会を実施する際、海外で活躍する徳島大学の卒業生を講師に選ぶことにした。

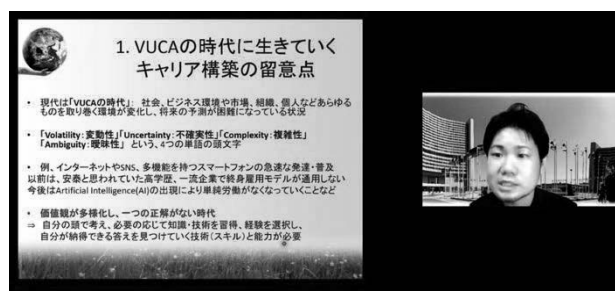


図1 グローバル講演会の様子

3.2 講演会の概要

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、グローバル講演会はオンラインで実施した。国連職員で徳島大学医学部医学科の卒業生を講師に、日本語で約1時間（約15分間質疑応答を含む）、グローバルキャリアを築くために学生時代にやっておくべきこと等について自身の体験をもとに話をしてもらった。参加者を広く呼びかけ、徳島大学の教職員や学生、地域の人も含めて、約40名が参加した。

3.3 GRIP 学生からの感想

グローバル講演会を受講した学生から様々な感想を聞くことができた。以下に、主なものを列挙する（一部抜粋）。

- 今回の講演で学んだことが沢山ありました。ひとつは、メンタルヘルスに対する考え方を改めるきっかけとなったことです。『無理に詰め込まない』、『あれこれやらない』、また『優先順位を絞る』ということが今の自分には出来ていないように感じました。これからメンタル面で自分を引き締めていこうと思いました。そして、国際的に働くということについて詳しく知ることが出来ました。大学生のうちに、自分の好きなこと、やりたいこと、また興味のあることを存分に研究し、社会的経験として活かせるように精進していきたいと思いました。
- 何かすごいことをやり遂げる人は一般人の私とは違うものだと異世界の存在のようにかんじてしまいがちですが、今回の講演でプロセスを教えていただいたことで、現実味が増しました。メンタルヘルスは私も大学の勉強とGRIPと部活、バイトをこなしていく中で重要だと感じていましたが、同じことをおっしゃっていて、やはりそうなのだと確認できました。
- 実際に国連機関で働いている方からお話を聞く機会はなかなかないので、とても貴重な体験をさせて頂きました。特に印象に残ったお話は、国連機関で働くことに伴うメリットとデメリットのお話です。メリットの中に挙げてくださっていたものはどれも魅力的なもので、私になりたいと思っている将来像にぴったりハマるものがありました。しかし、やはり国連機関となると世界規模で仕事をするため、たくさん大変なこともあるということを知り改めて実感しました。国も文化も全く違う人達が集まって仕事をするのは魅力的である一方、コミュニケーションの難し

さという壁があるのだとお話から理解しました。私も将来たくさん人の国籍の人と仕事ができれば、と思っているので、今回の講演で学んだ「今からどのような対策をすべきか」ということを自分のこれからのキャリアプランに活かすことができると考えます。今回学んだことを心に留めておき、自分の目指す将来像に近づけるように頑張りたいと思います。

- 自分自身も同じ学科の所属であるため、興味深くお話を聞かせていただきました。世の中には様々な働き方があること、世界に視野を広げてみることを改めて感じました。国連職員は漠然とカッコいいなあという気持ちがありましたが、どこか遠い世界のようにも感じていました。しかし、実際に国連職員として働かされている講師の先生のことを知り、自分から行動すればできるんだという思いに変わりました。在学中にしておくべきことや、海外に出ていく上で知っておいたほうがいいことなど、ご自身の経験からのとても有益なアドバイスをいただけて、本当に参考になりました。これから自分のやりたいことを常にしっかり考えるようにして、その都度できることをやっていきたいと考えています。自分から行動していくためにも、ビジョンをはっきりと持っておくことが大切だと強く感じました。

3.4. まとめ

GRIP 前期（第1期生）では、海外で働くことで得られるやりがい、ワークライフバランス実現、キャリア形成するために大切な心構えを学ぶ機会を提供することを目的に、グローバル講演会を行い、上記「3.3」のように学生たちは多くの学びを得ることができた。その中でも印象的であったのは、「どこか遠い世界のようにも感じていました。しかし、実際に国連職員として働かされている講師の先生のことを知り、自分から行動すればできるんだという思いに変わりました。」や、「何かすごいことをやり遂げる人は一般人の私とは違うものだと異世界の存在のようにかんじてしまいがちですが、今回の講演でプロセスを教えていただいたことで、現実味が増しました。」という学生たちのフィードバックにもあるように、参加学生の所属する大学の卒業生を講師に選ぶことで、講師を身近な存在と感じ、学生の良いロールモデル海外でのキャリア形成に対する敷居を下げることに繋がられたと考える。

4. 異文化理解講座および英語集中講座

ここでは 2021 年度前期および後期に実施した異文化理解講座、英語集中講座についてその概要を解説することとする。具体的には、まず両支援の背景と目的を述べた後、異文化理解講座の内容ならびに英語集中講座の内容について概説する。特に、後期の英語集中講座では、UTM の学生を対象としたインタビューならびにプレゼンテーション、英語インタビュー・プレゼンテーションに対する支援、UTeM の英語教員による本学学生に対する英語集中講座などの非常にユニークな活動を行ったが、本項ではこれらの活動についても解説を行うことにする。

4.1 実施の背景と目的

我々が外国語を学習する際、当該外国語を話す人たちと交流し、その人たちの文化や言語に対する近しさを感じることは重要である。

例えば、ここで韓国語を学ぶ学習者 A と B を考えてみることにしよう。韓国人の友人はゼロで、これまで大学の外国語科目として韓国語を学習してきた学習者 A の場合、韓国語は心的にやや距離を感じる「外国語」であり、自分の考えやイメージなどを表現・表出し、他者に働きかけ、その考えなどを実現する手段としての位置づけは薄いと考えられる。だが、その一方で、周りにたくさんの韓国人留学生や友人がいて、今も日常的に韓国語を使用している学習者 B の場合を考えてみると、韓国語は自分にとって友人と自分をつなぎ、自分の大切な居場所を維持するために必要不可欠なツールであり、大学の授業で単位のために学ぶ「外国語」などという位置づけではないと考えられる。このように、外国語を話す人たちとの交流が日常ベースで行われており、相手文化と自分の間にある距離が比較的近い場合、学習者もその外国語を日本語以外のもう一つの自己表現手段（つまり、第 2 言語）として位置づける可能性がかなり高まるものと考えられ、いわゆる交流を通して異文化理解を促進することにより、外国語能力の向上もかなり期待できるものと考えられる⁴⁾。

ただ、その初期段階を考えてみた場合、外国語学習や外国語能力が果たす役割は大きいと考えられる。典型的な例としては、語学教員であればだれもが一度は経験したことのある「英語が話せないから留学生との交流はちょっと…」、「日本語しか話せないから外国人への対応は…」といったケースを挙げることができるだろう。このように外国語や英語ができないから

という理由で外国人との交流を敬遠するケースは依然として多く、本学でも国際化を阻害するひとつの根本的な要因であった。

特に、日本人大学生のように、異文化との交流経験が少なく、外国語（この場合は英語）能力にも課題がある場合、異なる文化背景を持つ人に恐怖を感じ、結果、文化差に対し防衛的な反応を呈する場合は非常に多いと考えられる⁵⁾⁶⁾。「外国人は何を言っているか分からないし、怖いから関わらない」といった反応は日本人大学生以外の誰にでも起こりうるものであり、さほど特異なものではない。事実、日本人大学生の多くは異文化に相対した際に防衛的反応を示すことが多く、異文化との共通点や近しさを見出しすまでは至っておらず、その背景には「英語が話せる彼ら VS 英語が話せない私たち」という、英語を基軸とした二元論的な世界観が大きく影響していると考えられる⁷⁾。

このことはつまり、日本人大学生の異文化理解を促進し、グローバルな場面でも十分に機能するための基盤を作るには、①異文化との交流を通して文化的な近さを体感させ、異文化との共通点に気づかせるだけでなく、②外国語の集中トレーニングを通して学生の語学力を向上させ、実際の交流を通して「自分も外国語で相手とコミュニケーションできるのだ」ということを実感させるといった、文化交流と語学学習の両面を兼ね備えた支援が求められることを意味しており、新規に異文化理解プログラムを構築する際にもこれらの点に留意する必要があると考えられる。

そこで、今回の GRIP においては、これらの知見を参考に、

- ・ 異文化との交流体験が少ない学生に少しでも異文化を自分にとって近い存在として感じてもらうとともに、
- ・ 基礎的な外国語（今回の場合は英語）能力を向上させ、「自分たちも相手と外国語でコミュニケーションできるのだ」といったことを実感してもらう

といった目的を設定し、次項に解説する異文化理解講座と英語集中講座の 2 つを並列的に提供することとした。

4.2 講座の内容

前項にまとめた背景・目的を念頭に、今回の GRIP では、①異文化との交流で体験する文化差への対応について学ぶこと目的とした「異文化理解講座」、②基礎的英語力の向上を目的と

した「英語集中講座」の2つを中核としたプログラムを展開した。なお、後期（第2期生）のGRIPについては、マレーシア人学生へのインタビューを通してマレーシア文化と日本文化の比較を行い、その結果について発表することを目的とした「多文化紹介プレゼンテーション」を組み込んだため、前期とは内容面でかなり異なるものとなった。各講座の概要を以下に示すことにする。

4.2.1 「異文化理解講座」

本講座は、2021年度前期・後期に実施したGRIPのオリエンテーションとして初日に行ったものである。主には、先にも述べたように、異文化との交流体験を通して自文化との共通点や近しさに気づくことの重要性を主たるテーマとして講義を行った。

本講座を準備するにあたり、まず参考にしたのは、Bennett (1993)⁸⁾、Hammer (2011)⁶⁾、Hammer, Bennett, & Wiseman (2003)⁹⁾らが提唱する「異文化感受性発達モデル (Developmental Model of Intercultural Sensitivity (DMIS))」であった。異文化感受性について、文化差を思い込みや偏見にとらわれず理解する力として考えており、その根底には個人が持つ文化世界観が大きく影響していると述べている。DMISはこの文化世界観の変容を、

- ・ 「違いの否定 (Denial)」
- ・ 「違いの二極化 (Polarization)」
- ・ 「違いの最小化 (Minimization)」
- ・ 「違いの受容 (Acceptance)」
- ・ 「違いへの適応 (Adaptation)」

という5段階からなる発達段階として捉えた⁹⁾点で特徴的であるが、この理論を基に日本人大学生の異文化に対する反応傾向を見てみると非常に面白いことが分かる。

日本人大学生の場合は異文化に対し防衛的な反応をすることが多いことは先にも述べた通りだが、坂田 (2004)⁷⁾の分析を参考に考えると、例えば「道で困っている外国人に英語で話しかけたが通じなかった」などの英語にまつわるネガティブな異文化体験が原体験となり、英語力を基軸とした「英語ができる彼ら VS 英語ができない自分たち」といった二元論的な文化世界観を作り上げてしまった (Polarization) 結果、「みじめな思いをするかもしれないから、外国人とは関わらない方が身のため」といった自己防衛的な理由で異文化との接触を回避す

るに至っている場合が多いものと想定される。

この例からも分かるように、日本人学生を対象とした異文化理解プログラムを設計する際には、英語を基軸とした二元論的な文化世界観から如何にして脱却するか、そして脱却した後にどのような世界観を獲得するのが望ましいのかという2点が重要な意味を持つ。この中でもDMISは2つ目のポイントに対する重要な示唆を提示しており、今回の「異文化理解講座」では前後期共にこのDMISを基に講義内容を設定した。具体的には、

- ・ 今現在持っている二元論的な文化世界観 (Polarization) から「違いの最小化 (Minimization)」に到達することを今回のGRIPにおける目標としてもらいたい
- ・ そのためにも、異文化との交流体験を通して自文化との共通点や近しさに気づくことが肝要である

といった2点について講義を行った。なお、この「異文化理解講座」は、後述する英語集中講座のオリエンテーションと併せて実施した。

4.2.2 「英語集中講座」

英語集中講座は、GRIPに参加学生の基礎的英語力向上のために前後期共に開講したものであり、いわゆるオンライン型の短期留学の事前指導に相当するものである。全体としては、

- ・ 継続的英語学習への導入に関する講義
- ・ オンライン学習システムによる継続的英語学習支援
- ・ レベル別英語学習・英語プレゼン支援
- ・ オンライン型の短期留学に向けた英語ディスカッション指導

という内容で講座を構成し、最後のディスカッション指導は後期のみ提供した。

最初の「継続的英語学習への導入に関する講義」は、英語集中講座全体のオリエンテーションとして先述の異文化理解講座と併せて前後期共に初回に実施したものである。内容としては、「英語力を実用的なレベルまで向上させるには長期間の学習が必要」、「そのためにもGRIPをきっかけに、プログラム終了後も継続的に英語学習を行うことが求められる」、「日ごろの授業と同じように受け身的に受講するのではなく、自ら積極的かつ主体的に学ぶことが大事」などを主に取り扱った。

次の「オンライン学習システムによる継続的英語学習支援」に関しては、本学内に導入されている英語オンライン学習システム「スーパー

英語」を用いて行った（前後期共に実施）。システム内に組み込まれている問題（語彙・読解）を上級・中級・初級のレベルに分けて編成し、GRIP 参加者に約 40 日間自動配信した。毎日配信する課題は毎回約 30 分で完了するものを選択し、参加者が自分で好きなレベルを選択するように指導し、継続的な自律学習を実践するための一助とした。

3 つ目の「レベル別英語学習・英語プレゼン支援」は、本支援講座の前半部分に相当するもので、いわゆる「英語で意思疎通をすることに慣れる」ための導入的講座である。少人数クラスとするために、事前に行ったオンラインの英語能力判定テスト「CASEC」^{注7)}の結果に基づき、複数のクラスに分けて指導を行った。前期は成績に応じてクラスを4つに分け、1時間の講座を3回提供した。上位2クラスを外国人講師が、下位2クラスを日本人講師が指導を担当し、フリーディスカッションを中心とした基礎的な英会話の指導を行った。後期も成績に応じてクラスを4つに分け、上位2クラスを外国人講師が、下位2クラスを日本人講師が指導を担当した。

ただ、後期に関しては、講座回数を6回に増やし、UTM で学ぶ学生へのインタビュープロジェクトおよび英語プレゼンテーションを中核としたものに講座内容を変更した。インタビュープロジェクトの仕上げとして本学参加学生によるマレーシア文化と日本文化の比較を英語で発表するイベント（「多文化紹介プレゼンテーション」）を組み込んだ（図2）ことから、支援講座については「インタビューの方法やまとめ方を学ぶ」、「英語プレゼンテーションの方法を学ぶ」といった内容を取り入れた。後期の英語集中講座の内容については表4を参照してもらいたい。また、UTeM の英語教員に協力してもらい、基礎的な英語力を向上させるために英会話を中心とした講座を同時進行で展開した。

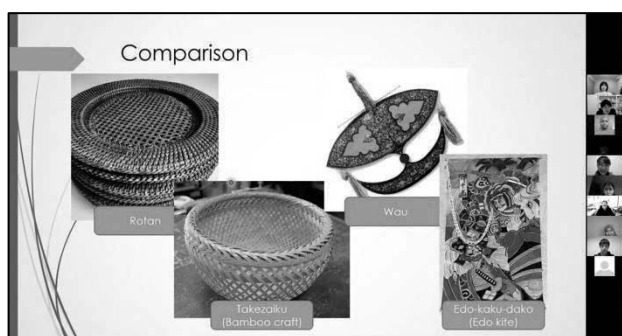


図2 「多文化紹介プレゼンテーション」の様子

表4 英語集中講座概要

回数	内容
1	インタビューの方法・まとめ方を学ぶ
2	英語プレゼンの方法を学ぶ
3	日本文化を説明してみよう
4	インタビュー実践①
5	インタビュー実践②
「多文化紹介プレゼンテーション」	
6	お礼状を書こう

最後の「オンライン語学研修に向けた英語ディスカッション指導」に関しては、オンライン留学で取り上げられると想定されるテーマを講師側で選定し、実際のオンライン留学を想定した形で支援を行った。左記の「レベル別英語学習支援」同様、CASEC の成績に基づき4つのグループに分け、上位2クラスを外国人講師が、下位2クラスを日本人講師が指導を担当した。なお、少人数化を図るため1回の支援を30分とし、各グループを2つに分けて合計9回実施したが、最下位のクラスについては1時間×9回の支援を提供した。

4.3 GRIP 学生からのフィードバック

上記の講座を受講した学生から様々な感想を聞くことができた。以下に、主なものを列挙することとする。

- ① 異文化理解講座・英語集中講座（継続的英語学習への導入に関する講義）について
 - ・ 「DMIS モデルで異文化感受性が段階分けされていて非常に興味深かった。自分は今この段階にいるのだろうかと考えながら講義を聞くことができた。」
 - ・ 「「自己表現の手段としての英語」という言葉が印象的だった。英語は人と自分を繋げてくれるものだと考えると、英語がより身近なものに感じることができた。」
 - ・ 先生が「講義の様に受けて終わりではなく、その経験を反省して何か発見はないか考えることをしなければ、このプログラムを受けた意味は全くない。」と言われ、それは確かにそうだと思った。反省をどうやってするかについては、用意されている振り返りシートを丁寧に書くことで行いたい。もう一つ「アクセサリにするために英語を学ぶと、どうしても限界がある。」と言われていたが、これは聞いたことがない話だった。確かに、日本語では言いたい

ことが言えるのに、英語では言えないのは「自分の言いたいことを英語にしたらこんな感じになるけど、変な英語だったら恥ずかしい。」と考えてしまうからだと思う。私が英語を用いる目的は、英語を日本語が通じない人に対するコミュニケーションツールにすることなので、アクセサリーにする際に気にするべき「間違っていたら恥ずかしい。」という考えには意味がない。「とりあえず言ってみて、間違っていたら直そう。」くらいの方が、気が楽になりそう。すぐに考えを変えることは難しくても、このプログラムの期間に少しずつ挑戦してみようと思う。

② 英語集中講座（オンライン学習システムによる継続的英語学習支援）について

- ・ 毎日の課題があったので、より英語に触れることができました。
- ・ スピーキング以外の力を身につけることが出来たから
- ・ リスニング力がついたから。
- ・ 難易度が三段階ある点。予定が立て込み課題ができる時間が少ない日が多々あったため、普段の難易度より少し落としたりなど調整できたのが助かった。SIU プログラムが終わった後も復習できる機会があればいいと思った。
- ・ 毎日英語に触れる習慣がついたから。
- ・ 自分のペースで進めることができたから。毎日英語を学習する習慣が身についたから。
- ・ スーパー英語を活用して隙間時間にコツコツと学習できたから。
- ・ 現地に留学していない分英語漬けということではできないので、スーパー英語で英語に毎日一定の時間触れられたのはよかった。でも、自分で選ぶとどうしても簡単な方に取り組みでしまったり、時間がなくてただの作業のように淡々と終わらせてしまうこともあったので、そこは難しかった。

③ レベル別英語学習・英語プレゼン支援、オンライン形の短期留学語に向けた英語ディスカッション指導について

- ・ 英語を話す機会が増え、さらに同じグループの人が話しているのを聞いて考えが深まるとともに、私ももっと自分の意見を英語で言えるようになりたいと思ったから。
- ・ 細かい言い回しや、発音を教えてもらったところ、そして、レベルや時間、話の内容

などもすごくよかったからです。

- ・ その日ごとに新しいトピックについて自分の意見を考え、話す練習ができる点がよかった。日常的な会話や自分の意見を言う練習が出来て SIU の授業を受ける上で、とてもよかったと思います。
- ・ 事前に指定されたトピックに関して、自らの意見のある程度準備して発表する形式で行われたため、自らの知っている単語だけでなく、新しい単語やフレーズを使う機会になったため。躊躇わず発言できる環境だったため、英語を使って会話をすることを楽しめた。
- ・ 毎回トピックを提示してくれてそれについてなんでもいいので一つでも意見を言うという姿勢が身に付けられた。また、文法面や単語面でより良い回答が作れるようにいつもアドバイスをしてくれたのがとてもありがたかった。
- ・ 少人数で発言する機会やお互いに質疑応答する時間もありとても楽しかった。

4.4 まとめ

今回の GRIP では、異文化理解と外国語（本稿の場合は英語）学習を促進するための支援を同時並行的に提供した。ここでは、プログラムを構築する際に参考とした異文化感受性モデルについて解説を行い、各々の講座について今年度の活動について解説を行った。

参加学生からの感想は概ねポジティブなものが多かったが、オンライン学習システムによる継続学習支援に関しては、若干内容ややり方を再考する必要があると思われる。今後の課題として取り組んでいきたいと考える。

5. 日本文化講座

5.1 概要

GRIP プログラムの中、3 回の「日本文化講座」が設けられて、日本だけでなく、四国の文化や社会（特に四国遍路）に詳しいモートン常慈が担当した。2021 年の前期（第 1 期生）では 90 分×3 コマ、後期（第 2 期）では 60 分×3 コマの授業があり、担当教員が参加していた徳島大学の学生（前期プログラムには徳島県内の 3 人の高校生も参加）やマレーシアにある UTeM 大学の学生に日本のインバウンド対策の歴史、日本のタブー、や四国の魅力、（例えば、名所、名別、祭り、イベント、伝統工芸等）を教えて、そのような事を英語で説明できるように指導した。また、視点をさらに絞って、徳島県のこ

と、例えば、阿波踊り、眉山、浄瑠璃、藍染、鳴門渦潮等も紹介した。さらにこの講座では徳島や四国の観光協会等が作成した動画も紹介して、それに出ている単語、例えば、和三盆、遍路等を説明してから、徳島大学の学生は英語でマレーシアの大学生に説明した。この講座の主な狙いは日本や四国の魅力等に（再）認識してもらったことだった。

この3回の講座では、日本とマレーシアの学生は話し合う機会があったが、時間が限られていたので十分に練習することができなかった。しかし、GRIP終了後、徳島大学の学生はSIUのオンライン留学プログラムで、この「日本文化講座」で習ったこと、マレーシア大学生と話したことを、今度このプログラムで使う機会があった。日本人の学生は日本、四国等について他国の人に説明する経験はあまりないので、このようなスキルを身に着くために、GRIPプログラムが非常に役に立つだろう。でもこの講座について受講者の声を聞くことが重要なので、第1期生と第2期生の「日本文化講座」後、徳島大学やマレーシアの受講生に「何を学びましたか」というアンケートを取った。ここで、いくつかのコメントや感想を紹介する。（強調のため下線を引いた）

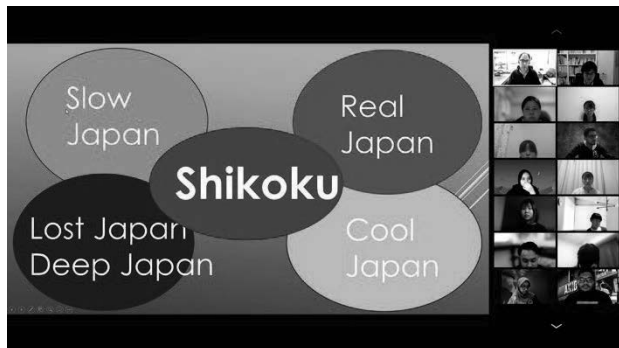


図3 日本文化講座の様子

5.2 参加者からのフィードバック

① 徳島大学の学生

- 徳島の歴史や文化が知れたこと。まだ徳島に来て3ヶ月しかたっていないので、単純に嬉しかったのと、日本語に加えて英語のスク립トがあったので、英語ではこういう言い回しができるんだと勉強になった。
- この取り組みで印象に残ったことは、私よりもモートン先生が日本文化を、徳島の文化を知っていたということだ。それと同時に自分の住んでいる町のことくらいは、十分説明できるようにしたいと思うようになった。
- 日本のものについて英語で説明する練習をし

たことが印象に残った。日本のものを説明するにはまずそのものや場所について知識を十分持っていないといけないし、加えて英語で説明するとなるとさらに難しかった。生まれてから住み続けている徳島のことさえも知らないことの方が多くて、もっと知りたいと興味を持つことができた。

- 日本の文化について英語で説明するのが思っていた以上に難しく、海外の方に聞かれたときにちゃんと答えられるようにもっと勉強しないといけないと感じた。徳島の文化では特にお遍路についてのお話が興味深かった。
- 昔から日本ではやさしい英語という本があり、外国人を受け入れる体制を整え、歓迎していたところ。読み方や例文までしっかりと書いてあり、おもてなしの心が強い国だということに改めて感じた。
- 徳島は田舎で誇れるものがあまりないと思っていましたが良い意味で日本らしさがたくさん残っていると再発見することができた。
- 主に徳島の文化、名産品、観光名所などについて様々なことを知ることができた。また、四国には四国八十八か所巡り、真珠、和紙、日本酒など日本を代表する多くの文化があり、海、川、山など自然に恵まれた、豊かで穏やかな場所であることを再認識した。
- 今まで何気なく過ごして見過ごしていた日本の文化をモートン先生の授業を通して改めて知ることができ、日本が素敵だなあと思った。いざ説明するとなると日本語から英語にできずに、ブレイクアウトルームで狼狽えることも多かったがそれもまたいい経験で、今後日本のことを外国人の友人に紹介するときの糧になったと思う。
- 徳島県に魅力あふれる場所や誇れる文化がたくさんあったこと。先生のお話やみんなの発表を聞いて、素晴らしい場所やモノがたくさんあるんだと感心した。特に自然豊かな山や川、神社などにはぜひ行ってみたいと思う
- 自分の知らない四国の魅力についてたくさん知ることができた。私はまだ徳島に来て日が浅いが、今回学んだ四国の伝統文化や食材、自然にたくさん触れてみたいと思う。
- 3週にわたって行われた日本文化の講義で私は自分が思った以上に日本文化について知らないことを学びました。3回の講義でしたが、とても濃い内容で面白かったです。
- 私はあまり日本の文化を知らなかったのですが、徳島や昔の文化をみんなで見たり話したり

たりして楽しかったです。

② マレーシア学生コメント (和訳)

- ・先生から日本文化、特に日本の伝統文化について多くを学んだ。
- ・このプログラムに参加する前は、日本の文化、特に徳島の文化についてあまり知りませんでしたが、このプログラムに参加してから、より深く学ぶことができた。いつか徳島に行き、その地を訪れることができたと思う。
- ・この講座に参加できてうれしい。徳島の文化や人々がどのように美しい生活を作り出しているのかに惹かれ、徳島を訪れたいと思うようになった。いつか徳島の自然を堪能したいと思います。この講座に感謝している。
- ・先生方をはじめ、このプログラムを企画された皆様、ありがとうございました。全く新しい経験をもたらしてくれたので、私にとって有意義なものだ。

5.3 まとめ

受講生のコメントを見ると、日本または四国の物事について英語で説明することが難しかったようだが、授業で習ったことが役に立ち、他の学生と話し合うことが楽しかったという感想を抱いている。また、徳島や四国の素晴らしいことや魅力に再認識または再確認ができたことも分かる。そして、国外の参加者もこの授業で日本、四国や徳島について多く学んだことも明らかであり、このような講座が設けられたことに感謝していることも分かる。このような良いフィードバックを見ると、GRIPの中にあるこの3回の「日本文化講座」はグローバルパーソンになるためには、かなり役に立った講座だと証明された。

6. 全体のまとめおよび今後の課題

本稿では2021年度前期(第1期生)および後期(第2期生)で実施したセッションの中で、「グローバル講演会」、「異文化理解講座」、「英語集中講座」、「日本文化講座」を取り上げた。

まず、「グローバル講演会」については、徳島大学の卒業生を講師に選ぶことで、講師を身近な存在と感じ、学生の良いロールモデルとして海外でのキャリア形成に対する敷居を下げただけでなく、学生のモチベーションアップに繋げることができた。

「異文化理解講座」や「英語集中講座」については、参加学生からの感想は概ねポジティブなものが多く、異文化コミュニケーションや英

語学習における知見について学習体験をもとに深められたと考える。オンライン学習システムによる継続学習支援に関しては、若干内容ややり方を再考する必要がある。

「日本文化講座」については、授業で習ったことが役に立ち、他の学生と話し合うことが楽しかったという感想を抱いている。また、徳島や四国の魅力に対する再認識または再確認を促すことができた。

このように、学生のアンケートを用いて分析を行ったが、英語力だけでなく異文化理解などの面においても一定の効果があり、GRIPにはグローバル人材育成において一定の効果があったと考えられる。

注

1. マレーシア工科大学 (Universiti Teknologi Malaysia)
(<https://www.utm.my>) は本学の協定大学である。交流会では、日本語履修学生と英義を用いて交流を行っている。
2. アメリカの南イリノイ大学 (Southern Illinois University) は本学の協定大学である。プログラムの共同開発には、英語センター (Center for English as a Second Language (CESL))
(<https://cesl.siu.edu>) がいち早く柔軟に対応してくれた。CESLの英語プログラムには、コロナ禍以前には毎年本学から学生たちを複数派遣している。
3. オンライン留学は、バーチャルに海外の学生と繋がって課題解決型のプロジェクト等を行う (Collaborative Online International Learning (COIL)) とは区別される。本稿では、オンライン留学を、「一定期間オンラインで海外大学の授業を受けたり、海外大学生と交流を行う国際交流プログラム」と定義する。
4. シンガポール国立大学 (National University of Singapore) は本学の協定大学ではないが、定期的にオンライン交流会を行っている。交流会では、日本語履修学生と日本語や英語の二言語を用いている。
5. 国際共修とは、本稿では「異文化間の相互理解を促すことを目的に仕掛けられたプロジェクト等の協働活動」(末松 2019; 松村 2016)^{10) 11)}と定義する。なお、シンガポール国立大学との国際共修については、その実践報告および効果について、「第17回大学教育カンファレンス in 徳島」で口頭発

表している (清藤・齋藤・橋本 2022)

¹²⁾。

6. マレーシアマラッカ技術大学 (Universiti Teknikal Malaysia Melaka) (<https://www.utem.edu.my>) は本学の協定大学である。
7. 「CASEC」とは、Computed Assessment System for English Communication の略で、JIEM (株式会社教育測定研究所) (<https://casec.evidus.com>) の提供するオンラインによる英語コミュニケーション能力判定テストで、このテストを受験することで TOEIC 等の換算スコアを得ることができる。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2012) . グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ) . p8.
- 2) 大岡栄美 (2016) 「関西学院同窓生と連携したグローバルキャリア教育の開発」関西学院大学高等教育研究. 6号. pp. 17-28.
- 3) 友松篤信 (2012) 『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版.
- 4) 坂田浩 (2017) 「Self-Access Learning Center (SALC) における英語学習プロセス再考」2017年度徳島大学国際センター紀要・年報. pp20-31.
- 5) Bennett, M. J. (2004). Becoming interculturally competent. In *Toward Multiculturalism: A Reader in Multicultural Education* (2nd ed., pp. 62–77). Newton, MA: Intercultural Resource Corporation.
- 6) Hammer, M. R. (2011). Additional cross-cultural validity testing of the Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*. <https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2011.02.014>
- 7) 坂田浩 (2004) 「日本人大学生の異文化感受性レベルに関する一考察」異文化コミュニケーション, 7, 137–158.
- 8) Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In *Education for the Intercultural Experience* (2nd ed., pp. 1–51). Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- 9) Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, 27(4), 421–443. [https://doi.org/10.1016/S0147-1767\(03\)00032-4](https://doi.org/10.1016/S0147-1767(03)00032-4)
- 10) 末松和子ほか(2019)『国際共修: 文化的多様を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.
- 11) 松村真宏 (2016) 『仕掛学』東洋経済新報社.
- 12) 清藤隆春・齋藤亨子・橋本智 (2022) 「シンガポールの大学との PBL 型国際共修～地元企業と連携したオンラインによるグローバル教育実践～」第 17 回大学教育カンファレンス in 徳島 発表抄録集. pp42-43.